第 3 回教員推薦図書（2023 年 7 月）

危機管理学部　山添　謙 教授

◆『東京の自然史』

貝塚爽平著
講談社（講談社学術文庫）

東京スカイツリー開業当時のコピーは「3000 万人に会える空」であった。東京スカイツリーから見渡せる「東京大都市圏」には 3000 万を超える人口が昼夜を問わず「生活」している。

本書は 1964 年に初版が出され，教養科目のテキストとして東京で生活を始めた大学生に向けて編まれたものである。その後，改訂を繰り返し，2011 年に文庫版となった。

私自身も，大学院で著者の授業を受け，富士山の火山灰層の厚さをテーマにした現地調査に参加した。3000 万の生活の舞台である東京の土地は，氷期―間氷期の繰り返しに伴い変動する海水準の影響を受け，富士山や浅間山の火山灰が降り積もり，縄文時代に内陸まで入り込んだ海が退くとともに形成された低地に「下町」が展開している。100 年前の関東地震では，山の手台地よりも下町低地で「家屋倒壊率」が高かったことが紹介されている。

高度経済成長期以降に拡大した東京大都市圏では，首都直下地震，富士山噴火，南海トラフ地震と津波など，特異な自然現象に遭遇する可能性が指摘されている。改めて「自然史」の視点から，私たちの生活の舞台について考えてみてはどうか。